

『問い続けること』

～ 未知を航る～



私たちを挑発し、あるいは心をざわつかせる問いを抱きしめよ。
それは、勇気を試す秘密を囁きながらうねる、多頭のヒドラのようなもの。

沈黙の幕を食い破る問いを大切にせよ。
夜ごと、遠吠えするコヨーテが流れ星に呼びかけるように。

ありふれた視界からすり抜けていく疑問を慈しめ。
それは私たちが苦しめ、抗い、そして飲ばせもする影のなぞなぞ。

私たちが投げかける問いは、より深い真理を予感させる。
若き日の単純な決まり文句よりも、はるかに驚くべき真理を。

答えは時とともに枯れ、色あせるかもしれない。
だが本質的な問いは残り続け、
歴史のページには常に神秘が織り込まれていることを思い出させる。

詩の余韻が消えたあとも、コーヒーショップの空気はどこか帯電しているようだった。言葉の残響が、彼らのあいだに微かな震えを残している。ミンが身を乗り出し、瞳に好奇心をにじませて言った。「つまりこれは、問いを立てることそのものを讃える詩なんだね。」

玲亜は彼の視線を受け止めた。その目の奥で、何かが静かに揺らめく。彼女はしばらく沈黙を漂わせてから、ゆっくりと口を開いた。「ええ、そう受け取れるわね。」彼女の言葉は、川の中で動く小石のように静かに形を整えていった。彼女は続けた。「一つひとつの思考は、より大きな夢の断片を映し出す反射なのかもしれないわ。」

アンドレイは椅子にもたれ、指を組んで静かに瞑目した。その顔立ちは穏やかだったが、声には幾多の季節をくぐり抜けた者特有の深みがあった。「問いを発すること、そして、いつ立ち止まるべきかを知ること……その繊細な術を学ぶには一生かかる。」

その重みのある瞬間を、ティンの鋭い笑い声が鮮やかに切り裂いた。笑いは波紋のように広がり、知的な思索の濃い霧を一瞬で吹き払う。「一生ですって、アンドレイ？」彼女はいたずらっぽく目を輝かせながら言う。「おそらく、多くの寿命が必要です」と彼女は言いました。今でも、私たちは正しい質問をし始めたばかりです。」

- T Newfields (和訳: 榎谷メリッサとテレサと吉田典子)

開始: 1990年 名古屋市 完成: 2026年 静岡市